

1945年4月の出来事	新聞名	新聞日付	補足説明
詔書渙発 降伏文書に調印	毎日新聞	1945年9月3日	2日、東京湾上のアメリカの軍艦ミズーリ号の甲板上で、降伏文書の調印式が行われたことを伝える。日本の全権である重光葵外相と梅津美治郎参謀総長が署名し、ポツダム宣言受諾と連合国による日本の占領が正式に決まった。
降伏文書に署名	ニューヨーク・ デリーニューズ 写真コレクション	1945年9月2日	ミズーリ号上で降伏文書に署名する重光葵外務大臣、それを見守るダグラス・マッカーサー連合国軍最高司令官（左）とリチャード・K.サザーランド参謀長（中央）。アメリカ通信隊撮影。
連合軍、帝都進駐	朝日新聞	1945年9月9日	8月30日に横浜に入った連合国軍総司令部（GHQ）は、9月に東京を占領する。8日は進駐式が行われた。この日は最高司令官・マッカーサーは横浜に戻った。東京の第一生命館に移るまで、横浜の税関長室がマッカーサーの執務室だった。
東條大将自決	読売報知	1945年9月12日	GHQから抑留命令が発せられた当日、東条英機は東京都世田谷区の自宅に到着した進駐軍憲兵隊員を待たせ、拳銃自殺を図った（その後回復したため未遂）。東条は日米開戦直前の1941年10月に首相に就任、陸相、内相なども兼任し権力を握ったが、極東国際軍事裁判(東京裁判)でA級戦犯として起訴され、48年12月に絞首刑となった。
社告	朝日新聞	1945年9月21日	朝日新聞東京本社がGHQから2日間の発行停止処分を受けたことについて、その経緯と発行再開を読者に伝える社告。同紙は15日から17日の紙面中にGHQによる「新聞記事取締方針」に違反する記事を掲載したとして、発行停止令を受けた。再開したこの紙面では休刊中の記事や写真を収録したため、通常の倍の4ページ建てになっている。
発行停止令の理由になった記事を掲載した15日付紙面	朝日新聞	1945年9月15日	この紙面に掲載された記事のうち、「新党結成の構想（上）鳩山一郎氏」「船腹事情極めて急迫」「軍の再台頭に疑惑」がGHQから指令違反とされた。鳩山インタビュー記事では、原爆を投下した米国を批判的に述べたことなどがGHQを刺激した。
天皇陛下・米記者に御回答	毎日新聞	1945年9月29日	25日のアメリカの新聞・通信社の記者の昭和天皇謁見の記事と、27日に昭和天皇がGHQ最高司令官マッカーサーを訪問した際の写真が掲載されている。28日に当時夕刊であった「東京新聞」が最も早く掲載（常設展「新聞のあゆみ」展示中）したが、内務省・情報局により発売禁止となった。29日付朝刊に同様に写真と記事を掲載した毎日・朝日・読売報知も発売禁止を命令されたが、GHQがその命令を取り消し、3紙は29日付朝刊を発行した。これにより、日本政府による言論統制法規が撤廃されることになった。
新聞、言論の自由へ 制限法令を全廃	朝日新聞	1945年9月30日	29日、GHQ最高司令官マッカーサーにより、「新聞並びに言論の自由に対する新たな措置」と題する指令が日本政府に通達された。新聞紙法、国家総動員法、新聞事業令、軍機保護法といった、言論統制法規の効力が停止された。
誤解招く娘の笑顔 粋な素足も挑発的	朝日新聞	1945年9月7日	進駐軍兵士への対応にご注意 GHQの占領に伴い、日本人とGHQ将兵の間に不愉快な出来事が起きていた。女性に向けて、人前で授乳や素足の下駄ばきなどは将兵にとって「異様な心の動揺を巻き起こす原因」であり控えるようにと述べる。また、若い婦人の笑顔は「万事御意のまま」と意志表示と思われるため、道を尋ねられたりしても事務的に応対すべきであるという。当時は進駐軍による性犯罪が多発していたが、GHQの検閲により暴行事件を記事にすることが難しかった。この記事でも検閲を意識してか、他の事例とともに女性への注意喚起を促す。

菜園手料理に舌鼓	読売報知	1945年9月8日	外国人女性記者の日本体験ツアー UP通信（現・UPI通信）の女性記者が、横浜市鶴見区の家を訪問、婦人に戦前・戦後の日本婦人の変化、女性の政界進出について聴き取った。「馴れない座布団に腰を下ろし」で質疑応答を行い、自宅で収穫した食材を使った家庭料理も振る舞われたとのこと。GHQの民主化政策における五大改革では「女性の解放」が掲げられ、のちに婦人に参政権が認められることになる。「和食文化体験ツアー」のような柔らかい雰囲気だが、日本女性の政治意識を調査する意図があったのかもしれない。
光芒に浮く国際港ヨコハマ	読売報知	1945年9月15日	街の灯りがとてもきれい……だけど 横浜港に夜の明るさが戻ってきた。GHQは「スピード・モア・スピード」を合言葉に、接収した建物を使って、瞬間に駐屯地区を設営。夜になるとビルの窓がこうこうと輝き、行き交うジープやトラックなどのヘッドライト、艦船のサーチライトもあいまって「フット・ライトを浴びたステージのよう」だ。「国際港ヨコハマが久しぶりで取り戻した明るさ」とあるが、壮絶な空襲を生き抜いた横浜市民にとって、自らの手による復興ではなく、複雑な心境だったかもしれない。
学徒と英会話	読売報知	1945年9月23日	「カムカムエヴリバディ」を先取り!? 英会話ブームに火をつけ「カムカムエヴリバディ」のフレーズで親しまれた平川唯一の「ラジオ英語会話」が始まるのは1946年2月。それより前に、旧制高校生が英会話の大切さを投書していた。「われわれの生活に今日ほど英会話が必要となった時代はない」と冒頭で強調、一歩外に出れば「一人一人が外交官」として米人と接する必要があるという。また、授業は原書講読が中心で、実践的な会話を習得できないと指摘。「小さな通訳」として日米両国の摩擦を少なくするよう心がけたい、と決意を述べている。つい先日まで、英語が敵性語だったことを考えると、感慨深い。